

平成 30 年度 地域づくり海外調査研究事業調査報告書
新たなコミュニティでつくるまちの未来
～ベルリンのアーバンガーデンから考える～

調査地：ドイツ・ベルリン

調査日：平成 30 年 10 月 26 日

平成 30 年 12 月

一般財団法人地域活性化センター

総務企画部クリエイティブ事業室 兼

人材育成室

吾郷 紘平

目 次

1. はじめに	1
(1) 飯南町の概要	1
(2) 飯南町の現状と課題	1
(3) 調査地の選定理由	2
2. 調査事例	2
(1) アーバンガーデン	2
(2) ベルリン市の概要	3
(3) 調査地	4
3. 考察	7
4. まとめ	8
5. おわりに	9

1. はじめに

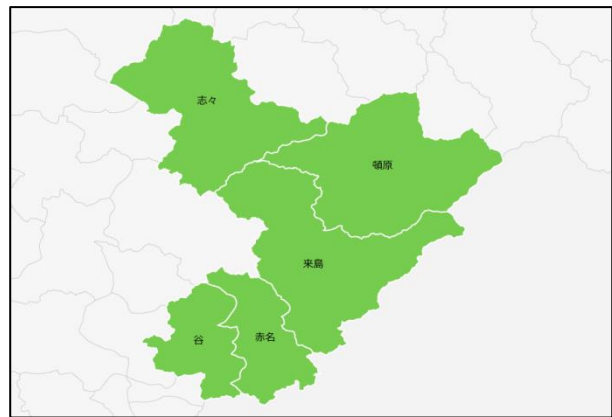
(1) 飯南町の概要

筆者の派遣元の島根県飯南町は、島根県中南部にあり、広島県との県境、中国山地の脊梁部に位置し、周囲を 1,000 m 前後の琴引山や大万木山などに囲まれ、平坦地の標高が約 450 m と、県下でも代表的な高原地帯である。面積は 242.88 平方キロメートル(東西 32km、南北 32km)で、約 90 %を山林・原野が占めている。人口は 5,031 人(平成 27 年国勢調査)である。

町の中心にある琴引山は、出雲風土記にその名をとどめ、悠久の歴史をうかがい知ることができる。また、瀬戸山城址をはじめとする多くの城址は、尼子毛利合戦をはじめ戦国の世の興亡の歴史を物語っている。

本町は、出雲・石見・備後の三国にまたがり、また陰陽を結ぶ中国山地の要衝として古くから開発され、たたら製鉄や良質米の産地としても知られている。

平成 17 年 1 月 1 日頓原町と赤来町の 2 町(5 地区)が合併し、「飯南町」が誕生した。



飯南町 5 地区

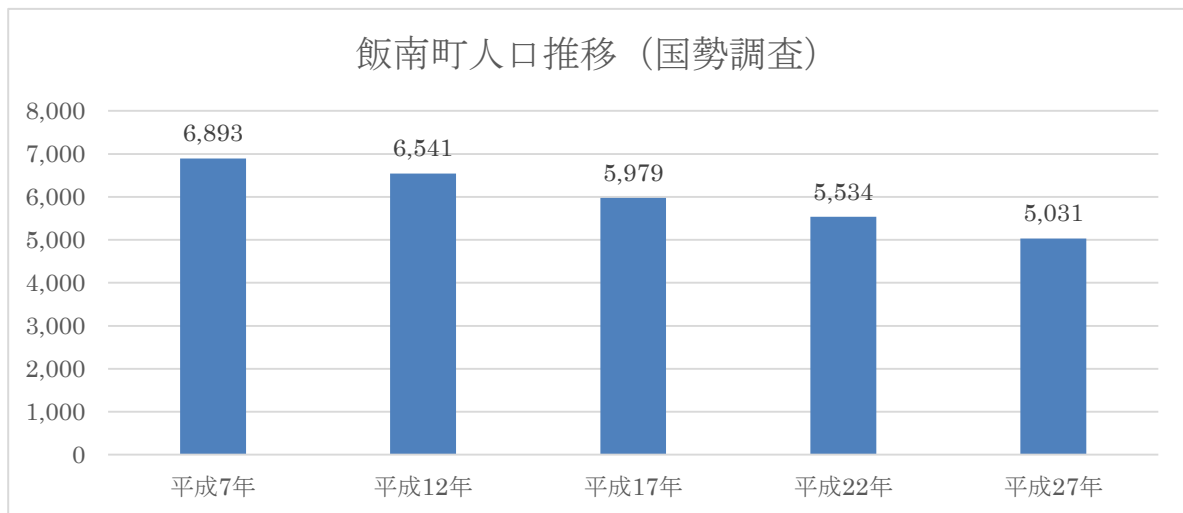
(2) 飯南町の現状と課題

平成 27 年 10 月に策定された「飯南町総合戦略」では、平成 18 年に策定された第 1 次総合振興計画で定めたまちづくりの基本理念『小さな田舎からの「生命地域」宣言』を引き継ぎ、「子ども」「活力」「つながり」をキーワードに基本構想及び基本計画を構築しており、家庭、地域、企業などが一丸となってオール飯南町として「まちぐるみで子どもを育てる」「女性が自分らしく輝く」いきいき暮らせるまちづくりを進めている。

しかし、広い町域に集落が分散していることもあり、住民は未だに各地区内でのつながりが強く、地区を越えたつながりが弱い。そのため、飯南町全体としてのコミュニティが醸成されていないのが現状である。

現状では、イベント等を除いて、地区を越えて住民が集う機会・場が少ないため、その創出が重要である。多様な世代や地区を越えて住民が関わりあえばより広域のコミュニティの醸成が図られる可能性がある

今回、地区を越えた新たなコミュニティを醸成するための手段を検討する上で参考となる海外の事例として、ドイツ・ベルリン市を調査した。



（3）調査地の選定理由

調査地として選定したベルリン市は、ヨーロッパで最も緑が多い都市で、約 40 万本もの樹木が生育しているとともに、それを活用した都市農園も多く存在している。このような都市農園をアーバンガーデンと呼んでいる。アーバンガーデンは新たなコミュニティを形成する手段としてヨーロッパで注目を集めていることから、コミュニティの醸成を促す仕掛けを学ぶために選定した。

2. 調査事例

（1）アーバンガーデン

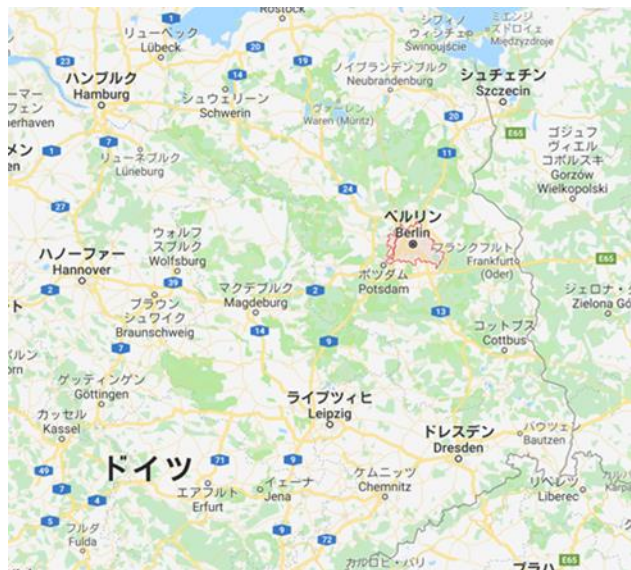
アーバンガーデンとは、先述のとおり「都市農園」という意味である。その起こりは 1860 年代にライプツィヒで始まった「クラインガルテン（小さな庭）運動」である。当時産業革命が始まっていたライプツィヒは、地理条件の良さから瞬く間に産業が集積され、人口が過密化し住環境が次第に悪化し始めていた。そこで、住民は子どもたちの健全な成長と人々の心身の健康を維持すべく、都市の外れに小規模な農園を作る

運動を興し、1864 年に最初のクラインガルテン協会が設立された。これが現在でもドイツを中心に欧州のいたるところで見られる「クラインガルテン」の始まりである。クラインガルテンの 1 区画の大きさは様々だが、最も多く利用されているのは 100 m² 程度のものである。それぞれの区画ごとに生垣や柵で囲まれ、利用者が個々に使っているため、利用者同士が交わる機会がほとんどないのが特徴として挙げられる。

このクラインガルテンとは別に、2000 年以降ドイツ国内のあちこちで盛んになっているのが「アーバンガーデン」である。アーバンガーデンは、野菜を栽培したいという環境・食に関する欲求だけでなく、共同体をつくりたいというモチベーションが背景にあり、訪れた人同士が体験を共有できるという特徴を有している。また、住民は、自分たちの住む都市を自分たちの手でつくる場として「アーバンガーデン」を活用している。誰でも自由に参加できるコミュニティの場として開かれているため、徹底的にデザインされた英国式庭園とは対極にあり、景観美の追求が目的ではない。

(2) ベルリン市の概要

ベルリン市は、ドイツの首都で人口約 350 万人。13 世紀にシュプレー川岸に商業都市として形成され、1700 年代にプロイセンの首都となって以降、ドイツの首都として発展する。1920 年には「大ベルリン」の成立により市域が大幅に拡大し、現在と同等の領域を有する都市となる。第二次世界大戦後、東ドイツの首都である東ベルリンと、西ドイツの事実上の飛び地で周辺をベルリンの壁（1961～1989 年）で囲まれた西ベルリンに分断された。1989 年のドイツ再統一により再び首都となる。



調査地（参考：googlemap より）

歴史を遡ってみると、特に旧東ベルリンは 1989 年のベルリンの壁の崩壊によって、政治・経済・社会の様々な面で文字通り価値観の転換を迫られた。急激な人口流出に伴い、産業が衰退し、大量の空き家が発生、さらに至る所で崩壊寸前の建物が取り壊され、都市の中に大量の空き地が発生した。また、移民の受け入れに伴い空洞化した

エリアに外国人が流入し、空き地はごみ溜めとなり、治安の悪化を招くこととなった。このような事態に対し、空き地を活用したコミュニティ形成の場としてアーバンガーデンが造られていった。

(3) 調査地

プリンセスガーデンの概要

今回、調査先として選定した、「プリンセスガーデン」は、ベルリンに 100 以上あるアーバンガーデンのひとつであり、交通量の多い環状交差点のモーリッツ広場に面する 6,000 m²の都市農園である。2009 年に開設された後、順調に利用者が増加し、多い時で 1 日 400 人、年間では約 8 万人もの市民や観光客など多様な人々が集まる場になっている。農園内では、移動可能なコンテナで 500 種類以上の作物が育てられている。このコンテナは共同利用で、誰もが気軽に参加できるよう工夫されている。また、カフェやバーを始めとして、自転車や家具を修理する工房などが軒を連ねる他、様々なアクティビティが備わっている。

この広大な農園は、もともと空き地であった。60 年以上放置されてゴミ溜めになっていた土地に目を付けたのが、歴史家のマルコ・クラウセン (Marco Clausen) 氏と映像作家のロバート・シュー (Robert Shaw) 氏である。彼らは、この土地を所有者であるベルリン市の承諾なしで占拠し、空き地を緑が溢れる空間に変えていき、市民運動や行政との調整を経て、借地料を支払って土地を利用する権利



(写真 1) プリンセスガーデンの様子
(筆者撮影)



(写真 2) ガーデンの理念が記載された
看板 (筆者撮影)

を得た。その後、収益を目的としない有限会社 Nomadisch Grun gGmbH という組織がこの場所を運営している。空き地は暫定利用地とされているため、契約が 1 年単位という不安定な条件の中、野菜や植物は移動可能なプランターに植えることや、寄付とカフェの売り上げから土地の賃料を支払うなどの工夫を凝らしている。

プリンセスガーデンは、キューバのハバナやチリのサンティアゴの近郊農業を手本としている。ハバナやサンティアゴでは農業を多様な住民が参加可能なコミュニケーションツールとして用いられているという。

以下、ガーデン内のアクティビティについて紹介する。

①カフェ

写真 3 の右斜め上に写っている男性を見てほしい。ハサミとビニール袋を手にし、ハーブを採取しているのが分かるだろうか。庭で採れるハーブや野菜は、寄付と引き換えに持ち帰ることができ、カフェではハーブティとして提供されている。来場者がハーブティを注文すると、ハサミとグラスを渡される。それをもって庭を散策して自分で好きなハーブを採取し、グラスに入れてカフェのカウンターに戻ると、お湯を入れてくれる仕組みである。つまり、来場者はお金と引き換えに「物」を手に入れるだけでなく、場をつくるひとりの人間として「参加する」という「機会」も提供される。



(写真 3) ハーブを採取する男性
(筆者撮影)

②ワークショップ

ガーデン内には様々なアクティビティが存在しており、そのほとんどがここを訪れた人びとによって作られたものである。ここでは、アクティビティが作られる過程をワークショップと呼んでいる。ワークショップは、運営者である Nomadisch Grun gGmbH が主体となって行われるわけではない。ここを訪れた人びとが共通の関心や目的により自発的にコミュニティを形成し、自分たちのやりたいことをやりたいように活動し

た結果として出来上がるものである。以下、ワークショップによって出来たアクティビティをいくつか挙げる。

一つ目は、蜂たちが体を休める養蜂箱である。この養蜂箱は、健康ブームの到来を機にスタートした蜂蜜採取のワークショップで作られたものである。自分の体内に入れる食べ物は、自分たちでつくるというアーバンガーデンが本来有する環境と食への関心という、誰もが生きる上で関わってきたテーマを設定し入口を広くしている。このこ



(写真 4) 養蜂箱の様子 (筆者撮影)

とは新たなコミュニティを形成する上で非常に重要であると考えられる。なお、このワークショップは、ガーデンの中で一番人気であり、長く続いている。

二つ目は、雑多であるが洗練された図書館である。造りも置いてある物も全く整っておらず、一見すると散らかっているように見える。しかし、見方を変えれば、この雑多さが敷居を低くしているとも考えることができる。徹底的にデザインされた場は敷居が高い印象を与えてしまう。そのため、「敷居を下げる」というキーワードは非常に重要なことと考えられる。なお、この図書館にある本は、訪れた人が持ち寄り寄付したものである。



(写真 5) 図書館内部の様子 (筆者撮影)

三つ目は、プリンセスガーデン全体を見渡すことのできる展望台である。この展望台は、100 人以上が関与して建てられた。展望台が完成するまでに、建物の設計から材料の調達、そして建物の建設という過程を経ている。この場所が出来上がるまでの過程に少しずつでも関わった人びとは、この場所に愛着を持ち、次々と新たなアイデアを出している。少数の人間が全ての過程を行うのではなく、多数の人間が少しずつ関わる「関わりしろ」をいかに作っていくかが重要だと考えられる。なお、展望台には映像鑑賞のためのスクリーンや子どもから大人までが遊ぶことのできるブランコまで

設置されている。

また最近では、大豆から豆腐を、キャベツからザワークラウトをつくるというワークショップまで広がり、運営側のマルコ氏もこの他にどのようなワークショップが開催されているのか全て把握しきれないという。このようにワークショップを自由に開催できる最



(写真 6) 展望台からの様子（筆者撮影）

大の要因として「完成図がない」ということを挙げることができるのではないかと。完成図がないからこそ、予想外の出来事が起き、その結果として訪れた人同士が協力しての起業にもつながっている。

3. 考察

今回視察したプリンセスガーデンでは、「環境と食」という一定のテーマが定められていることで、テーマに即した目的意識を持った人たちが集い、各々の想いを具現化していた。

しかし、日本の公園や都市緑地は、地方公共団体の管理のもと、一部の禁止事項はあるが、用途が限定されているわけではなく、広く公に開かれた場である。しかしながら、“何をやっても良い”ということある意味で“何をやっていいのか分からない”ことにもつながり、思考を停止させる。そのため、そういった場で何かアクションを起こすというハードルは高くなってしまう。事実、日本の開かれた場では、そこに人がいたとしても主体的な活動等が生まれるケースは少ないのではないだろうか。これは、飯南町も例外ではない。

コミュニティ形成の場に人が集うためには、多様な人が参画しやすい共感を生むテーマを設定する必要がある。日本の公園等に代表される公共の場がただの“場”ではなく、“人が集う場”として機能するためには、そこに共通の目的を見いだせるようなテーマの選定と設計が必要かもしれない。

また、人が集う場が持続していくには、その場を利用する人たちが自ら場をつくりあげるプロセスが必要である。先述のとおり、プリンセスガーデンでは、カフェや多様なワークショップを訪れた人びとが主体的に開設・運営している。つまり、このカ

フェやワークショップ自体が「みんなで参加して、みんなで決めて、みんなで作る」というプロセスを有している。主体的に活動した結果として、何かしらの価値が得られると、次の活動に向けてのモチベーションとなる。住民主導の活動を容認できるような考え方を持つ必要があるだろう。

このように、「共通の関心や目的で結びつき、共に価値を生み出す」という仕掛けを秘めていることが、これからの機会・場を創出する上で必要になってくるのではないか。

4. まとめ

今回、調査を行ったアーバンガーデンでは、「テーマとプロセス」を重視したソフト面からのアプローチにより、多くの住民が参画し、新たなコミュニティを形成し、そして新たな価値を生み出していた。

一方、飯南町でのコミュニティ形成を図る施策として多いのが、交流センターといった、いわゆる“箱モノづくり”である。物理的なスペースを整えたことに満足しがちであり、コミュニティ形成の場としては機能していないといっても過言ではない。

現在飯南町では、ソフト面からのアプローチとして、女性・若者が主体的にまちのことを考え、アクションに移すことのできる場『共創デザインスタジオ「ヒトカラ～hitocolor～イイナン」』（以下「ヒトカラ」という。）が動き出したところである。ヒトカラは、女性・若者を中心とした次代の飯南町を創る担い手が交流、対話を深める中で、多様な社会課題に柔軟に対応できる考え方のプロセスを学ぶとともに、実践に必要なファシリテーションスキル・解釈力を身に付けるプラットフォームである。



(写真 7) ヒトカラの様子（筆者撮影）

アーバンガーデンは、多様な人が参画し、地区を越えたコミュニティを形成する一つの手段となっており、今後更に増加が予測される空き地を効果的に活用することが

できる手段でもある。

本町でも、ヒトカラに参加した人が共感した仲間と共に新たな価値を生み出す場として、アーバンガーデンの「テーマとプロセス」を重視した仕掛けを応用することで、既成概念に囚われない新たなつながりを創出することができるのではないかと考える。

5. おわりに

住民主導の都市農園が抱える不安要素は、土地の継続利用に関する問題である。多くの都市農園は所有者と暫定利用の契約を結んでおり、常に追い出されるリスクを背負いながら活動している。住民主導の都市農園を持続的なものにするには、そこにしかない価値を発信し続けることで行政や市民の後ろ盾を得て、開発や不動産投資と対峙する必要がある。

日本においては、所有者の所在を把握することが難しい土地が増加しており、農地の集積・集約化や公共事業をはじめとする土地の所有権の調整が必要な分野で喫緊の課題となっている。今後、人口減少の進行に伴い資産としての土地の保有や管理への関心が低くなり、所有者不明土地がさらに増加する恐れがある。事実、土地の「所有者不明化」による問題が既に発生している自治体も少なくない。そうした中、多くの地方公共団体が空き地を地域資源として活用し、地方創生につなげようと模索している。

日本では「都市農園」というと、住宅街の外れにある市民農園や、郊外にある畑の数区画を借りて花や野菜を育てるというイメージが強い。こうした農園のほとんどは個人的に利用され、利用者同士が交わることは少ない。作物の世話には手間がかかるため、利用者も高所得者や時間に余裕のある高齢者に限られがちで、平日仕事に追われる人々にとってはハードルの高いものとなっている。また、日本の都市農園は、その形態からクライנגルテンのように所有者相互の監視が行われている状態に近い。

これでは、空き地を新たに整備したとしても、コミュニティの形成の場には繋がらないであろう。

一方で、最近では有機野菜や住環境、他者とのシェアへの関心の高まりから、日本の都市部でも建物の屋上を利用したガーデンやコミュニティ・ガーデンが生まれつつある。今のところ、有料会員制のガーデンが多くを占めるが、個人で借りるのではなくグループで借りるようなタイプが増えてきており、「野菜作りを通じた体験の共有」

という開かれた形に向かいつつある。

地方部の人と人とのつながりは都市部と比べて濃密なものではあるが、旧態依然の考え方が未だに残っており、地区内でのつながりで完結している場合が多い。

しかし、地方部であっても、地方公共団体が中心となり、空き地をコミュニティ形成の場として位置づけ、住民参加型の農園を形成することで、地区を越えたコミュニティが醸成され、住民と行政が一体となった地域づくりが推進されるのではないかと考え、今後の展開に期待するとともに、自分自身でも何らかの取組みを行いたい。

最後に、本調査の実施にあたり、一般財団法人地域活性化センターをはじめ、飯南町、そして視察で多大なご協力をいただいた Marco Clausen 氏に、改めて御礼を申し上げます。



(写真 8) 取材対応者の
マルコ・クラウセン氏（筆者撮影）

参考文献

- 馬場正尊・中江研・加藤優一 編著 著者 菊池マリエ「CREATIVE LOCAL エリアリノベーション海外編」(学芸出版社 2017)
- 日本の家「Speaking Gardens－ベルリンのアーバン・ガーデニング運動」
(<http://djh-leipzig.de/ja/archives/4070>)
- 飯南町「飯南町ホームページ」(<http://www.iinan.jp/>)
- 島根県 地域振興部 しまね暮らし推進課「しまねの郷づくり応援サイト」
(<https://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/www/index.html>)